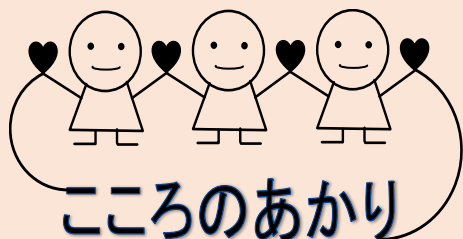


「心のあかりを灯す会」



「心のあかりを灯す会」は
阪神淡路大震災の被災地、神戸から
「希望のあかり」を分灯していただき
練馬で灯し続けています。

わたしたちは、過去の自然災害を語り継ぎ「防災の視点」から
手作りの人形劇などを通して『命の大切さ』『思いやりの心』を
伝えているグループです。

～阪神淡路大震災を経験して～ あかりメンバーからのメッセージ

災害は自分とは無関係で「他人事」だと思っていた。私は何の備えもしていなかった。ライフラインが全て止まり、家の中はめっちゃくちゃ…「避難所に行けば何とかなるだろう」と思って行った。小学校は人がびっしり、トイレは汚物であふれ、水も食料もなし、とにかく寒い…。幼い子どもを連れて、とてもいられなかった。電気が復旧しても2歳の娘は暗くなると怯え、家の中に入るのを怖がるようになった。それからは自分の「命」、大切な人の「命」を守るため、家の中を安全にして「在宅避難」に備えている。

神戸市灘区 2歳児の母

突然、ジェットコースターのような激しい揺れで目が覚めると、ベッドの上に家具が倒れ、隙間にいた私を父が助けてくれた。ライフラインが全て止まり、避難所に行ったが、体育館も教室もすでにいっぱい入れず、運動場で焚火を囲んで毛布にくるまり、極寒の一夜を過ごした。体調を崩し自宅に戻り、母がカセットコンロで温かい食事を作ってくれて、身も心も生き返った。近所の人と情報を共有し、助け合い、井戸水をくみ、炊き出しに並び日々を過ごした。家具転倒防止、在宅避難に備えての準備、最後は人とのつながりの大切さを震災から学んだ。

神戸市東灘区 24歳会社員

大きく突き上げる揺れから縦揺れが続き、家の中のものが一瞬で散乱。夜が明け、ベランダから見ると20か所以上で火柱が上がっていた。すぐに原付バイクで友人の安否確認に向かうと、信号は消え、道路は隆起し、多くの家屋は倒壊していたが、友人の無事は確認できほっとした。電気は昼頃復旧し、暖がとれたのが救いで在宅避難を続けた。しかし水や食料の調達には苦労した。水道、ガスの復旧には2～3か月かかった。ある高齢ご夫婦が物資を調達できず、餓死寸前で発見されたことがあり、近所の関わりや情報の伝達が重要だと思った。

神戸市灘区 30歳会社員

冬の夜明け前、震度7の揺れと同時に全てのライフラインが止まった。となりに寝ている4歳の子ども顔も、見えないぐらい真っ暗で怖くて動けなかった。部屋の中は壊れた鏡やガラスなどで危なくて、靴を履いて過ごしていた。ずっと余震が続いていたが、情報が入ってこないため、自分の目で見える範囲内のことしかわからなかった。電話もつながらなかったので仕事先の夫とも連絡が取れず、毎日子どもを守ることを考えて過ごした。震災体験後はいつも手元にあかりを置き、バックの中には携帯ラジオを入れている。

神戸市灘区 3児の母

練馬区〈防災・安全〉教育推進協議会
「心のあかりを灯す会」

事務局：練馬区区民防災課 ☎5984-2601

e-mail: KUMINBOUSAI@city.nerima.tokyo.jp

<http://www.city.nerima.tokyo.jp/kurashi/bosai/jishinsonae/kokoro/index.html>



←いつもの防災に役立つ情報や、グループの活動紹介、報告を掲載しています。